

茶壺道中

茶壺道中とは、宇治（京都）から江戸（現在の東京）へ日本最高品質のお茶を将軍家へ運ぶという、江戸時代(1603～1867)の習慣のことです。しかし、江戸の夏は暑く湿気が多いため、翌年の収穫まで茶の品質を保つのは不可能でした。そのため、1652年より、茶の一部を現在の都留にあった勝山城に持込み、山間地域の穏やかな夏の気候を活かして、秋まで保管するようになりました。涼しい空気だけでなく、富士山の神秘的な力が茶を保ち、その風味を増すと信じられていました。

この時期に都留を訪れた壮麗な行列は、町人にとって大きな行事でした。町人は、そのにぎわいを大いに楽しただけでなく、旅人をもてなすことで経済的な恩恵も受けました。茶壺道中は、何世紀も前に終わりましたが、歴史上のこの行事を記念して、近年、毎年開催されるつる産業まつり（10月最終日曜日）で再現されるようになりました。イベントでは、侍の衣装を着た人々の行列が、大きな茶壺を運ぶ採茶使の一団のお供をします。